

加藤 宏文 著

## 高校文章表現指導の探究

自分もこういう実践をやってみたい。読み手にそう思わせることができれば、実践の書は、九分通りその成果を伝えたととしてよからう。本書もまた、読む人にそう思わせるものの一冊である。その中の数々の試みは、へわが国の中等作文教育史上、初めての成果Ⅴといわれる。

加藤宏文氏は、本学の夏の国語教育学会での発表回数も最も多い人である。したがって、その発表の言葉調子——格調といったものを多く耳にする。本書がまた、その言葉調子をよく響かせている。

「国語教室」における「探究」とは、この内実に、青春に、「聴き入る」ことである。そう思い切るまでに、二十年が過ぎた。「聴き入り」記述をする。記述をしては「聴き入る」。そう徹しようとした。中で、その入り口を、「文章表現」

の「書き出し」に求める必然を、先学から学んだ。本書は、その心を、「国語教室」の三年間に、ほぼ通して傾け注いだ軌跡である。まことに、不十分である。「聴き入り」ない焦りがある。「国語教室」たりえてきたか。

これは、本書のおわりに記されているもの一節である。本書の全体像と探究の精神をなお堅持する筆者像が、この一節からでもうかがえる。

本書の構成は、つぎのようになっている。

### I 書き出し文指導の実際

一 書き出し文の分析と考察——「わたしに」とっての「ダンス」——

二 詩教材における価値学習とその表現——二〇〇字作文の指導——

三 「羅生門」学習における相互批評とその表現——第一感想文の書き出し——

四 随想教材における「理解」と「表現」——二〇〇字作文の構想——

五 「赤い岩」学習における構造理解とその表現——四〇〇字作文の書き出し——

### II 文章表現指導の実際

六 「人間の土地」学習におけるカード法とその表現——語作文からの積み重ね——

七 評論教材における「範例」理解と表現——書き出す意欲のために——

八 課題学習の持続と表現力——「ひといき作文」指導の試み——

九 近代俳句の理解と表現——二〇〇字批評の試み——

一〇 短歌教材における解釈とその「表現」——「理解」の順序と書き出し——

### III 文章表現指導の持続

一一 「現代国語」学習において指導をどうつづけたか——近代小説論の展開——

一二 「古典」学習において「表現」をどう指導したか——源氏物語の端役たちに学ぶ——

一三 「小論文」の学習指導をどうすすめたか——Dさんの場合——

この構成からも察知できるように、詩、俳句、短歌、随想、小説「羅生門」、「赤い岩」、

「人間の土地」に、古典、評論というふうには、加藤宏文氏の実践の目配りは広い。しかも、それらの実践の一つ一つがずしりと重い。さて、加藤宏文氏の実践目標の基本は、価値学習と技能学習の統合にあると見られる。たとえば、つぎのようにである。

もとより、「事項」「学習指導要領」の指導事項——引用者注の多くが示しているように、「表現」における技能学習上の具体的な段階の設定と、その着実な克服も焦眉の急である。しかし、「教室」におけるわたしたちのとまどいは、むしろそれ以前のところにある。意欲が、かき立てられなくてはならない。伊藤整の文章について言えば、「青春」についての、大げさには、思いもよらなかった、しかし、わたしたちの内実にびんと響いてくるこの発想の与える力こそが、「範例」である。

わたしたちは、こういう意味での「範例」のつぶさな「理解」を通じて、「価値学習」の目標を達成する。「表現」は、その価値に支えられた意欲の、まずは伸びやかな活動の場でありたい。(一六九ページ)

傍線引用者

加藤宏文氏の学習指導過程の基本をたずねてみる。「人間の土地」の実践(Ⅱの七)でなされたのは、△一語作文からの積み重ね▽である。

- (1) 通読。あなたは、何を考え始めたか。  
〔一語作文〕
- (2) 第一節の精読。「幻覚」と友情〔二語作文から一語作文へ〕
- (3) 第二節の精読。満足と誇りと詩り〔二語作文へ〕
- (4) 第三節の精読。「救い」の予感〔三語作文へ〕
- (5) 第四節の精読。人間としての連帯〔四語作文へ〕
- (6) 主題のまとめ。行動するということ〔構想、書き出しの一文〕
- (7) 生きることとわたしたち。あなたは、どう考えおさめたか。〔四〇〇字の論理〕

加藤宏文氏は、この実践に関して、△「理解の階襲」から「理解の超克」への前進▽と、いうことを言っておられる。この発想は、「近代小説論」の実践(Ⅲの一一)では、△学習

計画の三つのふし▽として示されている。

- ① 近代小説を「読み味わう」
- ② 近代小説論を「読み考える」
- ③ 近代小説論を「書く」

これはまた、「小論文」の実践(Ⅲの一二)で、明確におし進められた。すなわち、「読む」——「考える」——「つくる」である。

本書の教示してくれるものは多いが、中でも、高校生の文章表現の解析のしごとがある。そして、それをふまえた評価のしごとがある。評価のしごとは、「理解」そのもの、「理解」から「表現」へ、「表現」そのものについてというふうに順次に進められる。実践は、「相互批評」の実践(Ⅰの三)、「二〇〇字批評の試み」(Ⅱの九)を経て、「小論文」の学習指導(Ⅲの一二)での「Dさんの場合」を典型例として結晶せしめられている。(A5判、三五四ページ、昭和五八年八月一日、溪水社刊、四、〇〇〇円)

(中例 正巻)